

私がなぜ現在の科目を選んだか

「脳神経内科と遺伝子医療研究センター」

信州大学医学部内科学第三教室

中村 勝 哉

旧研修制度の最終年度に卒業しました。学生時代は講義室よりはグラウンドで大きな声を出している学生で、体力には自信がありました。生来生まれ持つ画像認識能力の低さ（美術が苦手）から外科系は向いていないと漠然と考えていました。そんな後ろ向きな理由で内科系を考えていましたが、当時は卒業と同時に所属先を決定することが一般的で、各内科の魅力は十分には理解していないまま決断をする時が迫ってきます。結局、当時の池田教授がおっしゃった「俺がお前を一人前の医者にしてやる」の言葉だけを頼りに脳神経内科に入局しました。脳神経疾患は「わからない」、「治らない」病気が多いというイメージでしたが、「診る」と「聞くとは」大違い。多くの患者さんからの学びを通じて脳神経内科の魅力に取りつかれていきました。

専門医・学位を取得した頃、転機は突然やってきました。遺伝子診療部（現遺伝子医療研究センター）は

私がなぜ現在の科目を選んだか

「糖尿病・内分泌代謝内科」

信州大学医学部内科学第四教室

西田 大 晃

私が医学の勉強を始めて、最初に強く興味を持った診療科が糖尿病・内分泌代謝内科でした。4年生の頃の臨床講義の授業がきっかけだったと思います。内分泌疾患の検査値の高低だけでなく、フィードバックを考慮して他の検査値との関係から診断する点や、糖尿病の患者さんの状態に応じて様々な機序の血糖降下薬を使い分ける点が勉強していて面白いと感じました。また、ごく少量のホルモンが全身の代謝や電解質のサイクルに大きな変化を起こす、高血糖による小さな血管へのダメージが後々に全身の色々な臓器・神経で障害を起こす、といった形で内分泌疾患も糖尿病も小さな変化が体の様々な場所に大きな影響を与えていく面があり、そこが劇的で特に面白いと感じていました。

その後、病院実習・初期研修と多くの科で研修させ

開設当時から脳神経内科医がサポートしていましたが、その機会を頂くこととなりました。気持ちの整理もつかないまま、当時の福嶋教授に挨拶に伺うと、「今年行われる専門医試験を受けなさい」。キャリアの中盤での学び直しは、衰える一方の体力・記憶力との闘いです。一方で、新たな出会いもありました。次世代シークエンス登場し、ちょうど医療現場で実用化が始まった時期でしたが、福嶋先生からその導入の機会を与えて頂きました。新たな領域へのチャレンジは学び直し中の私にピッタリで、これまで診断できずもどかし思いをしていた多くの患者さんの遺伝学的診断を経験させて頂きました。また、新たな視点で医療を見ることにもつながりました。内科医としての診療では、どのように患者さんに伝えるか？という視点で工夫をしていましたが、遺伝診療部門では、患者さんの訴えをどのように聴くか、傾聴が重視されていました。

現在の医療は多様化し、基本領域に相当する診療科でカバーできない領域の重要性が増してきています。私は図らずも基本領域と二階建て領域の両方の経験をする事になりましたが、このようなキャリアパスは今後増加していくものと予想しています。少しでも若い方々の参考になれば幸いです。（信大平15年卒）

ていただき、それぞれの科の面白さややりがいを実感して進路についてはかなり悩みましたが、最終的に自分の最初に感じた面白いという感覚を信じて糖尿病・内分泌代謝内科を選びました。

実際に糖尿病・内分泌代謝内科医として働き始めて、治療を進めていくには内服を毎日続けてもらう、食生活や運動習慣を変えてもらう、といった形で患者さんの日々の習慣を変えてもらうことが重要だと感じます。同時に習慣を変えていくことの困難さも感じています。特に糖尿病の場合は患者さんの多くに自覚症状がないため、今困っていることを良くするためではなく、未来を良くするために頑張ってもらう必要があります。そこが非常に難しいと思います。それでも丁寧に説明して日々の習慣を見直してもらい、検査結果が改善して喜ぶ患者さんを見るとやりがいを感じます。患者さんが達成することのできた日々の生活の小さな変化を、糖尿病のない人と変わらない寿命とQOLの実現という大きな結果につなげていけるように、日々精進していきたいと思います。（信大令3年卒）